# カナダ・トロントにおける日本語教育の現状報告

島田徳子　山下みゆき

要旨

1994年３月から４月にかけて、水谷信子先生のご配慮によりトロント大学を訪れ、東アジア研究科の中島和子教授からトロントにおける日本語教育の現状について様々なお話をうかがうことができた。トロント大学では、実際の授業を見学したり、コンピュータを利用した教材に触れたりすることができた。また中島教授のご紹介で、日本人移住者の子弟のための日本語補習校の鈴木美知子校長にもお会いすることができ、継承語としての日本語教育についてのお話をうかがった。本論は主に、先生方のお話をもとに、トロントにおける日本語教育の現状を紹介したものである。

[ｷｰﾜｰﾄﾞ] ﾒｲﾝｽﾄﾘｰﾑ、ｽﾍﾟｼｬﾘｽﾄ、ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ、　継承語

## １．はじめに

カナダは多くの移住者から成り立つ多民族国家といわれているが、中でもオンタリオ州の州都トロントでは実に様々な国籍の人々が生活している。日本語学習の面から見ても、オンタリオ州の日本語学習者数は多く、カナダ全体の４分の１を占めている。[1]

私達は、1994年３月から４月にかけて（山下はうち数日間）トロント大学を訪れ、東アジア研究科の中島和子教授、谷原公男講師からトロント大学における日本語教育についてお話しをうかがい、授業見学をさせていただいた。トロント大学はトロントの中心部に位置し、緑豊かな広大なキャンパスを一歩出ると、カナダ最大の経済都市としての街がある。日本語教育に関してもトロント大学の中島教授、谷原講師は、単に大学における日本語教育だけでなく、日系人子弟を対象とした継承語としての日本語教育のあり方や、現地の日本語教師の研修・情報交換・教材作成等に専門的な立場から積極的に参画され、トロントの日本語教育活動の中心となって活躍されている。本論はそこで見聞したことの一部をまとめ、トロントにおける日本語教育の現状報告をすることを目的とする。

## 2．トロント大学における日本語教育

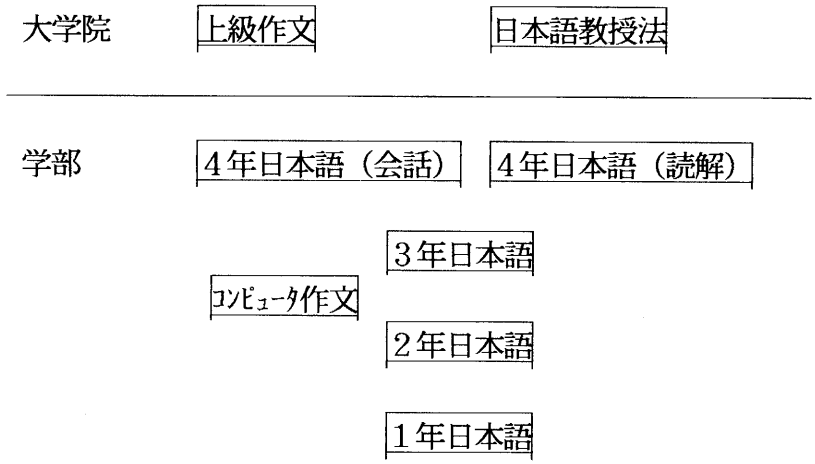
### 2－1．トロント大学における日本語教育の概要

トロント大学では1961年から日本語教育が行われ、学士・修士・博士課程で主専攻・副専攻のコースがある。このコースは、“Japanese Language Instruction”と呼ばれ、メインストリームの日本語教育として位置づけられている。しかし、近年日本語学習者数が定員を越え、一貫した質の高い日本語教育を行うことが困難になり、また学習者のニーズも多様化してきたため、1991年から”Special Japanese Language Training”という、工学・文理・法学・ビジネスの分野のスペシャリストのための日本語集中教育を開始した。現在トロント大学ではこれらの日本語教育が二本立てで行われており、日本語学習者数は合計約500名で、教師数は専任教師４名である。

### 2－2．メインストリームの日本語教育

図１はメインストリームの日本語教育内容をおおまかに表したものである。

図１．メインストリームの日本語教育内容




（中島教授作成CAJLE1989年度日本語教師研修会発表資料をもとに筆者が作成）

学部で行われる日本語教育は、「１年日本語」「２年日本語」で初級の日本語教育が行われ、２年間の授業時間は300時間足らずということである。「３年日本語」からは中級の日本語教育が行われ、４年間の日本語の授業時間は500 時間程度である。また、中級者の読み書き能力を伸ばすために希望者を募り、「コンピュータ作文」の授業が行われている。（「コンピュータ作文」の授業の詳細は後節に譲る）中島教授のお話では、４年間の授業には時間的な制限があるため、４年間でどれだけ日本語の"Good language learner" を育てることができるか、が大切であるということだった。

私達は「３年日本語」の中島教授の授業を見学させていただいた。以下、簡単に授業内容について紹介する。

使用テキスト：『総合日本語　初級から中級へ』水谷信子(凡人社)
学生数：約30人～40人ほど
学習時間：約100分
授業内容：テキスト10課「カード」

①日本で使えるカードの紹介をした後で、学生にどんなカードをもっているか尋ねる
②カードの長所と短所を学生にあげさせる
③テキストへ。先生が本文を朗読。２回目は、文節ごとにゆっくり読み、その後もう一度ふつうの速さでまた聞かせる。この時に学生にポーズ、イントネーションの印をつけさせる。その後、皆で一斉に読ませる。
④黙読しながら意味を考えさせ、質問を受け付ける。
⑤質問シート(内容確認の問題と短文作成のための問題)を渡してペアになって、日本語で相談しながら解答をさせる。
⑥学生に質問を読ませて、皆の前で答えさせる。

※教師が①～⑥までの間の適切なところで、語句の意味の説明や文法、文型の説明を与えていた。

## ２－３．スペシャリストのための日本語教育

"Special Japanese Language Training"は、工学・文理・法学・ビジネスの各学部のサポートを得て、25名程度の優秀な学生を学部・大学院から募り、約450 時間の日本語集中教育を１学年と一夏かけて行ったあと、日本の企業、研究所で研修を積むコースである。このコースは"Work-in-Japan Program" の一部として開設されたもので、その中には以下の３つのコースがある。

①JAE200Y：９月～４月に授業が行われる。週に６時間の授業とペアセッションがある。
②JAE300Y：５月中旬～８月中旬の夏季集中プログラム。全体で約450時間の日本語学習の後来日し、日本の企業で研修をする。
③JAE301Y：JAE300Y同様、５月中旬～８月中旬の夏季集中プログラム。

♦ JAE200Yのクラス
使用テキスト：『JAPANESE FOR EVERYONE』（学習研究社）／ﾌﾟﾘﾝﾄ有り
学生数：約11人
学習時間：約100分
授業内容：
①ディクテーション。（毎回恒例）１問につき３回教師が読むのを書き取る。全部で２問行う。解答は学生に黒板に縦書きで書かせ、学習者に正誤判断をさせる。
②「電話会話」のプリント（イントネーションの印がある）を用いて「会話Ｉ」のテープを２度聞かせる。そして、質問があるかどうか学習者に尋ねる。
③会話をリピートさせる。１回目は文節ごとに区切って、２回目は途中で指名して言わせる。発音が困難なところは教師が注意する。
④１回通して読んだあと自分の名前に置き換えてペア練習をさせる。
⑤皆の前で発表をさせる。
⑥「会話Ⅱ」へ進む。
⑦「～ておく」の文型の説明、練習。

## ３．コンピュータと日本語教育

### ３－１．教育とコンピュータ利用

トロント大学の中島教授は、様々な日本語教育用ソフトの開発者として、またコンピュータを日本語教育の現場に取り入れている海外の日本語教育者として著名な方である。先生とコンピュータの出会いは約10年程前で、トロント大学教育大学院にカナダへの移住者が持ち込んだ言葉を「言語資源」と捉え、親から継承する言葉の維持・発達の研究と啓蒙活動を目的とするＮＨＬＲＵ（National Heritage Language Resource Unit)という機関ができた時ということである。この時、21ヵ国語をプロセスするワークステーションをゼロックス社から借用し、継承語・外国語教育にこれがどのように役立つかという研究において日本語・中国語を担当することになったのがそもそもの始まりということである。中島教授はコンピュータを語学教育の中心的なところで使用することは難しいと感じながらも、上級日本語の学生の自由作文で使わせたところ非常に効果的で、作文ではコンピュータが中心になれると実感され、本格的に日本語教育・継承語教育へのコンピュータの活用の研究を始められたということである。

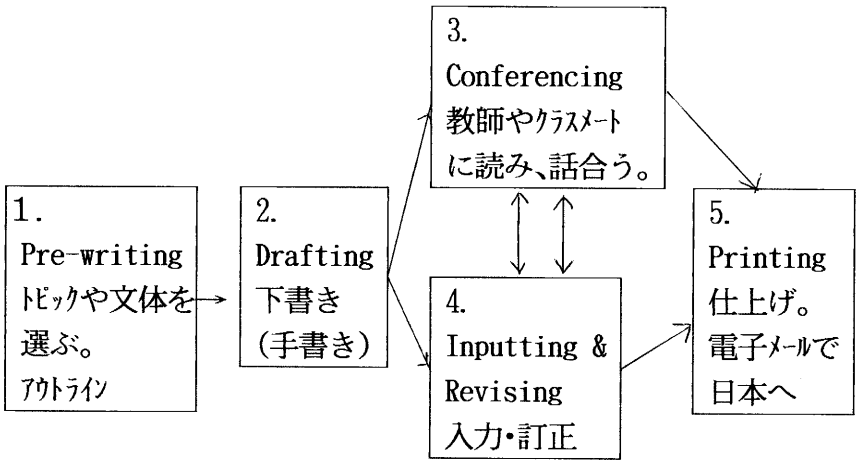
語学教育でコンピュータを使う場合、Taylor(1980)はTutorとして使おうとする立場と、Toolとして使おうとする立場があると言っている。[2] Tutorとする立場は、コンピュータが教師の代わりに教えてくれるというCAI(Computer-assisted Instruction) の立場で、Toolとする立場はコンピュータが学習者の学習活動を支援する「道具」と捉える、CALL (Computer-assisted Language Learning)、またはCALLE(Computer Aided Language Learning Environment)の立場である。

中島教授は、教師が学習者個人個人のレベルに合わせて知識を与えるというＣＡＩの基となっている教育観よりも、学習者の自発的な学習を助け、学習者の想像性、創造性、知的好奇心を生かして「発見学習」ができる環境作りをコンピュータでしようというＣＡＬＬやＣＡＬＬＥの教育観がより適しているのではないかと考えている。外国語での自然な交流や体験学習を促進し、個々の学習者の内面からの学習動機に働きかけるコンピュータの利用が重要であると思われる。

## ３－２．作文教育とコンピュータ

作文教育におけるコンピュータ利用が効果的であることにいち早く気付いた中島教授は、日本語のメインコースを受講する中級の学生の読み書き能力を伸ばすために、１９８７年からコンピュータ作文のコースを開始した。この日本語の作文コースはトロント大学の学生と、東京大学教養学部の英作文の特別コース（鈴木博教授担当）の学生同志が電子メールを用いて手紙をやりとりする中で、互いに語学を学ぼうとするものである。それは約150 時間以上日本語を学習したカナダ人学生が日本語で作文を書き、東大生は英語で作文を書くというふうに、第２言語での交流をしながらそれぞれの言葉の作文力を高めようとするものである。[3] このコースでは、まず学習者はトピックを選び、下書きをし、教師と話し合いながらコンピュータに入力する。何度も教師と話合いを重ねて訂正し、仕上げをプリントアウトして確かめた後、入力したものを電子メールで日本へ送る。送信時間は大学間の公衆回線(BITNET)で２、３秒で、それに対する返信は翌週の授業までに届いている。図２は、中島教授が作文のプロセスを５段階で表したものである。

図２．作文の課程




このコンピュータ作文の授業の様子を見学させていただいたところ、先にあげた作文のプロセスのどの段階においても、学生自身が自発的に

作業を進め、教師は段階に応じて学生達の作業を円滑に進めるための支援を行っているにすぎなかった。その様子は、まるで教師は本棚に並んでいる辞書や参考書のように、学生が必要を感じた時に自由に手を伸ばし利用しているかのようだった。中島教授のお話しによると、そもそも大学のメインストリームの日本語コースを選択する学生のバックグラウンドとして、高校生の時日本に留学したことがあったり、日本人移住者の子弟であったりすることが多いが、両者とも読み書き能力(literacy skill)が低いことが多く、これらの学生の読み書き能力を意識的に伸ばすことが必要になってくるということだった。そのためには、日本語を読み書きする時間を多くすることが重要で、まさにコンピュータ作文の授業はこれらのニーズに合致しているといえるのである。学生達は自分達が日本語で手紙を書くことにより、日本語の文法や文体を理解し、日本語でどのように自分の考えをまとめれば相手が理解しやすいのかを実感し、またネイティブ・スピーカーとの交流のなかで日本の文化や日本人の考え方に直に触れることができるのである。コンピュータ作文の東大生との手紙のやりとりは週１通の割合で、週３時間の授業時間内に仕上げなければならず、学生にとってはスピードの要求される作業といえる。中島教授は書く作業を、「さっさと書く作業」と「じっくり書く作業」の２つに分け、手紙を書く作業は「さっさと書く作業」と考えておられる。「じっくり書く作業」としては、月１回の割合で作文を書くことが取り入れられている。

最後に、学生達のコンピュータ作文の授業に対する感想を紹介する。トロント大学を訪れた時期がコースの終了の時期と重なっていたため、学生達の感想を日本語で書いたものを見せていただくことができた。

- コンピュータ作文の授業では自分の書きたいことが書ける。
- 日本の文化に直にふれることができた。
- 日本人の友人ができて嬉しい。
- 今まで学んできた文法や単語を十分活用する時間になった。
- 日本語で一番弱い点であった長母音と短母音との区別を確実にするきっかけになった。なぜなら、長母音を書かなければならない時、短母音を書くとコンピュータは正しい漢字を画面に出してくれないので母音の長さをよく注意するようになった。

これらの学生達の感想からも、このコースがいかに充実した内容のものであるかがわかると思う。しかし、このコースは毎年人気が高く受講希望者が多いため、希望者全員が受講することはできない状況にあり、一人でも多くの学生が参加できるようにするにはどうしたらよいかが今後の課題として残っているということであった。

## ３－３．まとめと今後の課題

中島教授は、作文教育でコンピュータを使用していく中で漢字教育にも効果があることを実感されていた。その頃、コンピュータのマルチメディア化に伴い、自然な音声、映像、写真、絵と一緒に文字を自由自在に扱うことができるようになったこともあり、自習型の日本語コンピュータ教材の一つとして漢字学習用の“kanjiCard”を開発されている。また、会話をコンピュータを使って自習できるような教材をつくることができないだろうか、ということで現在研究を進められている。会話といっても、基礎・対話・スピーチと、対象とする会話の種類によってコンピュータに求められる役割も変化すると先生はお考えになっているようである。

また、将来構想としてはカナダの土地柄、遠隔地教育(Distance education)の中で、コンピュータのコミュニケーション機能により、距離と時間の制約を取り除き、日本語教育者・学習者同志が互いに交流することができる環境作りを行っていきたいということであった。実際、仕事上日本語を必要とするが、定期的に日本語のクラスにはでられない多忙な弁護士やビジネスマンから、パソコン通信やファックスや電話によるロールプレイなどを駆使した自習型日本語コースの開設の要望もでているということであった。いずれにしても、コンピュータを利用するには、自律学習をカリキュラムにどう取り入れるかが重要なポイントとなると中島教授は主張されている。

今回一番日本と異なっていると感じた点は、コンピュータを教育の現場へ導入するにあたって、数多くの企業と文化系研究者とのより密接な関係と、大学内におけるコンピュータの様々な専門家と文化系研究者とのチームワークの良さであった。コンピュータを実際のカリキュラムの

中で積極的に導入するためには、コンピュータソフトの開発体制や稼働後の運用体制が、コンピュータ利用のための教育理論を構築することと同じくらい大切であるということを実感した。

## 4．トロント国語教室における年少者への日本語教育

### 4－1．はじめに

カナダでの年少者への日本語教育は、イマーションプログラムが比較的成功している点や、移住者の子弟に対する移住者の母語と母国の文化を伝承しようとする継承語としての語学教育が盛んである、という点で特徴的である。トロント大学があるオンタリオ州でも例外ではなく、継承語教育が盛んで、63か国語の言語教育が州政府の援助を受けて行われているという。

ここでは、日本人子弟に日本語の補習授業(現地校などに通学している日本人、あるいは日本人子弟の生徒を対象に、土曜日や放課後を利用して日本の学校の一部の教科の授業)が行われている、「トロント国語教室」の鈴木美知子校長のお話から、「トロント国語教室」で行われている年少者への日本語教育の概要を紹介する。そして、最後に、海外における継承語としての日本語教育の内容やあり方について少し考察したいと思う。

### 4－2．トロント国語教室の位置づけ(トロント国語教室学校案内より)

1976年9月にトロント日本語学校内に「国語教室」が誕生した。入学資格は満4歳～15歳の児童で、現在165人の生徒が、13学級に分かれて学んでいる。学校の基本姿勢として、学校(教師)と家庭とが理解し合い協力し合って教育活動を推進させる、学校、生徒、家庭の三位一体の教育の実現をはかることを掲げている。また、学習においては、卒業時に日本の小学校六年生の教育課程修了時に要求されるバランスのとれた「読む」「書く」「聞く」「話す」4技能と同程度の日本語能力の習得を教科目的としている。学校の特色としては、以下のようなものをあげている。

・全父兄参加によるボランティアの学校運営
・父兄教師の採用
・北海道の小・中学校との姉妹校交流
・卒業生の学校費用による記念旅行
・クレジット・コースへの継続教育体制

授業は土曜日の３時間、9:00〜12:00に行われている。ステージとレベル及び使用教科書は以下に示すとおりである。

| ステージ | | レベル | 使用教科書 |
|---|---|---|---|
| 初歩期 | | 1 | なし |
| | 4〜5歳中心 | 2 | 課題学習 |
| 形成期 | 前期 | 3 | 一年上　かざぐるま |
| | 6〜7歳中心 | 4 | 下　ともだち |
| | 中期 | 5 | 二年上　たんぽぽ |
| | 8〜9歳中心 | 6 | 下　赤とんぼ |
| | 後期 | 7 | 三年上　わかば |
| | 10〜11歳中心 | 8 | 下　あおぞら |
| 充実期 | | 9 | 四年上　かがやき |
| | 12〜13歳中心 | 10 | 下　はばたき |

「トロント国語教室」は「楓っこ」というニュースレターも発行していて、筆者が手にした「第11期卒業生、記念特集号」では、理事長、校長、教師の書いた文や児童生徒の作文などが記載してあった。

トロント内では日本人子弟を対象とした日本語学校が５校あるそうだが、「トロント国語教室」はその中の１校であり、近年は生徒の数が減少しているそうだ。鈴木校長によると、同教室の問題点は、学習時間が少ないこと、義務教育とは異なるので親によって到達目標が異なり、生徒の日本語のレベルもまちまちであること、現地の学校教室を週末のみ借りていることから生じる物理的条件の悪さ、教師の研修が行いにくいことなどがあるということだった。

校長の話では、国語教室で行う、日本人師弟に対する日本語の授業は外国語と国語の中間で、協力し合って言語教育を根気強く行うべきこと

が大事であるという。また、「知識」として日本語をつめこんで覚えさせるのではなく、「知恵」としてことばを教える継承語教育であるべきだそうだ。最近、「トロント国語教室」の教師の移動が少ないことなどもあり、以前と比較すると教育内容は改良されてきているということも聞いた。また、教師側としては、子供の心をどう開くかが重要であり、根気や向上心、熱意があり、言葉に対する感性のある教師が求められているそうだ。

## ４－３．海外における継承語としての日本語教育のあり方について

子供達に対する海外における日本語教育には、大まかに分類して、紹介してきた、海外移住者の子弟に対する「継承語としての日本語教育」と駐在員である親を持つ子供に対する「海外子女への日本語教育」の２種類があるだろう。筆者が教えている中学校での帰国子女の生徒を見ていると、彼らの両親は日本へ帰国した際のことを考慮し、子供を日本人学校へ通わせ日本語をきちんと学習させておいたり、現地校と平行して補習校へも通わせ、意識して国語をしっかり学ばせる努力をしているようだ。もっとも、両親の意識の差や滞在国の事情、その他の原因によりそうではない場合もあり、帰国後、子供が成長に見合った日本語を身につけるのに苦労をすることもあるとは思うが・・・。

しかし、今回紹介した「トロント国語教室」の生徒達は、基本的には移住者の子弟であり、将来帰国する予定がある生徒に比べて日本語を学習する動機が弱く、日本語学習の到達目標が低く設定される傾向があるのではないだろうか、という素朴な疑問がわく。中島和子(1993)は、この点に関連して、日本人子弟への語学教育で大切なことはマイノリティの子供はあくまでもマイノリティだが、マイノリティの子供を強める教育、逆境とたたかう力を養うこと、ユニークなルーツを持つことに誇りを持たせることだと述べている。[4]また、教師は子供達が自分を表現する言葉を与えてあげることが必要であり、各教科の学習内容と結び付けて言葉を教えるべきであることも主張している。

一方、同氏が行ったカナダの日本語学校卒業生に対しての実態調査の結果から、日系子女の日本語教育は「母語教育」と「外国語としての日本語教育」と「バイリンガル教育」の接点にあり、この三領域にまたが

るユニークな方法論の開発を必要としているという。[5]具体的には、より効果的な家庭言語のあり方、二言語発達の基礎となる「読み書き能力」のカリキュラム開発、二言語の干渉や混用に対処する効果的な矯正方法などの開発が望まれるとされている。その実態調査が行われてから数年たち、昨年中島先生を筆頭にカナダ日本語教育振興会が日系子女に対する会話力テストの開発を行っているとの報告があった。[6]その内容は、継承語の会話力を的確に捉らえるために、「基礎言語面」「対話面」「認知・段落面」から会話力を査定する基準を考案したものである。フィールドテストでは、このテストが外国語として日本語を学ぶ子供達にも役立つことがわかり、このようなテストを行うこと自体が子供達の日本語学習の意欲を高めることが確認できたそうだ。

今回、自分の意志で来日して日本語を学んでいる国内の多くの日本語学習者とは学習内容や動機、環境、学習条件も大きく異なる、トロントでの日本人子弟への日本語教育の現場に接し、海外での年少者への日本語教育のあるべき姿について色々考えさせられた。たとえば、海外における日本人子弟への日本語教育を考える時、移住者という立場から絡んでくるアイデンティティの問題や現地語とのかかわりなども無視できないと思う。また、学習していることばをそれと異なる言語環境(トロントの場合は英語)に多く接する中での日本語の「話す」「聞く」力と「読む」「書く」力の発達の仕方とその相互関係はどうなっているのか、同状況において継承語である日本語を子供に教授する家庭内での理想的な言語環境とはどういうものなのかなどと興味は絶えない。

国内では、最近、いわゆる帰国子女に対する教育のあり方についての議論が活発になってきたように思えるが、日本語を継承語として海外移住者子弟に伝えるための教育はまだまだこれから研究、開発されるべき分野なのかもしれない。今後とも国内、海外での年少者に対する日本語教育のあり方について学んでいきたいと思っている。

## 5．おわりに

水谷先生のご配慮により、私達は1994年３月から４月にかけて（山下はうち数日間のみ）トロント大学を訪れ、トロントにおける日本語教育

について学ぶことができた。このような貴重な機会を与えてくださった先生には心から感謝している。また、突然お邪魔したにもかかわらず、ご多忙な中お世話くださった中島和子教授、谷原公男講師、鈴木美知子校長にもこの場を借りて再度感謝の意を表したい。

今回はトロントにおける日本語教育の現状を大まかにまとめてみたが、海外での教育現場にこのように深く接することができ、日本語教育の広がりを痛感した。この経験を今後の自分の教室活動に結びつけて考え、役立てることができればと思っている。

引用文献

1:「日本語教育機関探訪(8)トロント大学」『月刊日本語』1994年11月号
2:Tailor, R(ed.)The Computer in the School:Tutor, Tool, Tutee. Teachers College Press, 1980
3:「コンピューターと日本語教育」『月刊日本語』1992年3月号
4:「シンポジウム　外国人子女のための日本語教育」『月刊日本語』1993年　1月号
5:中島和子(1988)「日系子女の日本語教育」『日本語教育』66号　日本語教育学会
6:中島和子・桶谷仁美・鈴木美知子(1994)「年少者のための会話力テスト開発」『日本語教育』83号　日本語教育学会

（島田徳子　：お茶の水女子大学日本言語文化専攻修了生）
（山下みゆき：駐韓日本大使館公報文化学院）